

戯れに科学は使うまじ

藤永 太一郎*

恋愛は売り物にしたりはしない、On ne vendit pas avec l'amour 「戯れに恋はすまじ」という仏映画があった。科学も同様かけひきの道具に使ってはならない性格のものである。その科学を方便に使う不真面目さが現代文明をそして社会を危うくしている。

昨臘京都でCOP3、地球温暖化防止提契国会議が開催された。要するに「世界各国が石油消費を減らす約束をしよう」という事なのだが、その実現のために、「石油を使うと二酸化炭素が大気中にふえる、それが赤外輻射をとめるから温室の効果によって地球が温暖化する、その事は重大な地球規模の環境破壊であるからこの会議を催すのである」と説明された。

今世紀に入って科学を方便に使う政治や倫理の目的を達成しようという試みが目立つようになった。最初は控えめに使われたが近頃は恒常化しその事が現代文化を著るしくゆがめるに到っている。悪いことには、大衆が科学は真実であるが故に、まことはそんなに真実があるわけがないのであるが、信頼し帰依して疑うこと希だからである。

かくして科学の名の下にコンセンサスが形成される。その有様は時に中世における魔女狩りにも似て反論されることなく猛威を振るい、その危険が指摘されない。

原爆は正義を守るに役立ち、今も戦争を回避するに役だっているとか、臓器に欠陥があればこれを癒すのではなく他人の良い臓器と交換するのが現代医学の正解となっている、など数え上げれば限りがない。科学とその関連技術が可能にしたものは、そのこと自体によって免罪符が得られたとする道徳の退歩は驚くべきものである。

人は武力で問題解決をしようとしてはならない、まして戦闘に参加していない無辜の民を殺傷してはならないということ、身体髪膚これを父母に受く敢えて毀傷せざるは孝の始めなり、というような古来の規範の崩壊が人類を世紀末に追いこんでいる事に気付かなければならない。

折りも折り、米地震学者が日本の地震学は予知に偏って基礎研究が遅れているとの批判をネイチャー誌に発表した（朝日、1月12日版）。地震を予知して発生しなかった時、更に、約束しながら予知なしに発生した時の混乱を想うと、天気予報とは格段の相違があり、科学者が約束してはならない性格の課題であることに気付くのである。

科学者もまた我田引水のために科学を使うべきではない。

* (財) 海洋化学研究所 所長